そよかぜ

毎日新聞西部社会事業団だより

第88号　2014年3月

発行所　〒802－8651
北九州市小倉北区紺屋町13-1
(公財)毎日新聞西部社会事業団
発行人　木村　雄峰
電話 093-551-6675 ファクス 093-541-8009
E-mail：s-maiswf@cotton.ocn.ne.jp
郵便振替　01770-2-40213
ＵＲＬ　http://www.mainichi.co.jp/seibu_shakaijigyo/

13年度歳末助け合い募金集計

	13年度		12年度		前年度比	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
一般募金	550	4,211,692	557	3,961,794	-7	249,898
海外救援金	88	632,605	53	293,000	35	339,605
小児がん	86	543,123	84	564,437	2	-21,314
小計	724	5,387,420	694	4,819,231	30	568,189
東日本大震災救援金	20	594,210	24	773,141	-4	-178,931
希望奨学金	35	884,961	55	1,248,872	-20	-363,911
フィリピン台風災害救援金	65	713,214	0	0	65	713,214
合計	844	7,579,805	773	6,841,244	71	738,561

歳末助け合い募金
前年度に比べ増加

毎日新聞社と当西部社会事業団が広くお願いした2013年度の歳末助け合い募金「愛の義援金」の集計結果がまとまった。海外救援金、小児がん征圧募金、東日本大震災救援金、毎日希望奨学金、フィリピン台風災害救援金を含めた募金総額は、8844件、7599万9805円にのぼり、前年度に比べると73万8561円の増加となった。

指定寄付を除いた一般募金は児童養護施設や母子施設、障害児施設などの子どもたちへの新入学や卒業の祝い品プレゼントや福祉諸団体への助成金として活用し、他の指定募金は関係機関や団体へ配分・送金した。ご協力に深く感謝します。

今年度の歳末募金は、寄せられた募金の総額が前年度の総額に比べ、やや増加した。東日本大震災救援金と希望奨学金は前年度比で大幅に減少したが、それ以外の社会福祉基金と指定寄付金は、前年度より増加し、小児がん征圧募金も微減にとどまった。

このほか、歳末募金の第二次配分として山口県の児童福祉連絡会や福岡県の交通遺児を支える会、九州盲導犬協会、福岡・北九州のいのちの電話、北九州あゆみの会、障害福祉ボランティア協会などの福祉団体に活動助成金を贈った。

◆肢体不自由児・者の美術展
毎日社会事業団賞に福岡市の中根さん

第32回肢体不自由児・者の美術展（日本肢体不自由児協会など主催、毎日新聞社会事業団など後援）で、福岡市立長住小学校２年の中根伶菜さん（８）の「エイヤッ！玉入れ」＝写真＝が毎日新聞社会事業団賞に選ばれた。

作品は、運動会で一生懸命に仲間と玉入れ競技に頑張る姿が、画面いっぱいに書き込まれ躍動感にあふれている。中根さんは「クレヨンで描いて、余白を水彩で塗っていくのが大変だったけど、入賞できてうれしい」とにっこり。父治夫さん（47）は「こんなに素晴らしい絵が描けるなんてびっくり」と話した。

現在、入院中だが「嫌いなお肉もちゃんと食べて元気になる」と意欲的。将来の夢は「本当は絵よりも音楽が好きなので、ＡＫＢみたいなアイドルになりたい」と笑顔を見せた。

同美術展は14年２月24日～３月２日、福岡市中央区天神のアクロス福岡で開催され、多くの来場者でにぎわった。

◆早鞆高校生徒会が募金を寄託
「フィリピン台風災害の復興に」と

11月の台風災害で甚大な被害を受けたフィリピンの復興を支援しようと、下関市の早鞆高校生徒会が校内の募金活動で集めた義援金３万８０００円を毎日新聞西部社会事業団に寄託した。生徒会は毎年この時期に募金活動に取り組んでおり、集まった募金を赤い羽根共同募金と骨髄バンクに贈っている。今年は現地の台風被害の様子を知り、フィリピンの復興支援を新たに加えたという。

生徒会議長の水野楓君（２年）と役員の宮原諒達君（２年）が毎日新聞下関支局を訪れ、義援金を手渡した。水野君は「ニュースで現地の復興が遅れていると知り、何か力になりたいと思った。一日も早く元通りの生活を取り戻してほしい」と話し、宮原君は「金額は少ないけど、復興に役立ててもらいたい」と語った。

毎日新聞下関支局に募金を持参した早鞆高校生徒会の水野君（左）と宮原君

生徒会は11月25～27日、登校時間帯に校門前で協力を呼び掛けたり、クラスに募金袋を配布したりして寄付を募った。約12万円が集まり、この中から一部をフィリピン支援に充てることにしたという。

歳末チャリティー即売展
多数のファンでにぎわうも売上低迷

全国の一流作家の先生方のご理解とご協力により、毎年末に実施している当社会事業団恒例の歳末チャリティー「全国寄贈書画・陶工芸品即売展」は昨年12月、北九州、山口、福岡の３会場で順次開催し、多数の美術ファンが訪れた。しかし、売上は過去最低となる１３００万円台にとどまった。08年度以降、右肩下がりの厳しい傾向が続いている。

即売展には、全国の洋画家、日本画家、書家、名刹の高僧、陶芸家、工芸家、芸能人ら約８００人から１４００点を超す作品が寄せられた。これらの作品を３会場に振り分け、前年度の即売展で残っていた作品と合わせて展示・即売。いずれの会場でも、特に著名な作家から寄せられた作品約１００点は入札方式とし、２日目に集計して落札者を決めた。

美術ファンでにぎわった福岡展

会期と会場は12月７、８日が北九州展（北九州市小倉北区の毎日会館）▽14、15日が山口展（山口市の旧「人形のふじもと」特設会場）▽21、22日が福岡展（福岡市中央区のアクロス福岡）。今年度は３会場とも比較的天候に恵まれたものの、全体的に例年に比べて来場者数は低調だった。

今年度も事前ＰＲに重点を置き、チラシの作成・配布、毎日新聞紙上での特集記事掲載、各会場展直前の地方版社告、テレビ局によるニュース放映、事業団ホームページでの作品紹介などを実施し、来場者増加を図った。しかし売上高は、前年度比で約１００万円減の１３００万円台という厳しい結果となった。歳末展で売れ残った作品は３月１日、北九州市の毎日会館で開いた年度末展で、価格を更に値引きして展示・即売して売上増を図った結果、この日だけで４００万円以上の売上を記録した。

即売展の売上から諸経費を差し引いた益金は、多様な福祉事業に活用。児童福祉や障害者福祉、高齢者福祉、ホームレス自立支援などの活動に取り組む団体や各種施設への助成金などとして活用する。

◆全国ふうせんバレー大会
発祥の北九州市で開催

ゴム風船でバレーを楽しむ「全国ふうせんバレーボール大会」が11月10日、北九州市八幡東区の市立総合体育館で開かれた。大阪府や長崎県など６府県から48チーム約７００人が参加した。

日本ふうせんバレーボール協会（北九州市）が主催し、毎日新聞西部社会事業団などが後援。ふうせんバレーは１９８９年、北九州市内の障害者団体などが考案したもので今年24回目となる。

競技は障害者と健常者６人が全員ボールに触れて10回以内に相手コートへ返す。ボールは直径40㌢のゴム風船で、目が不自由な人でも参加できるように中に鈴が入っている。

会場では、車イスの参加者が手で軽く触れてトスし、健常者がアタックする姿も見られた。

車イスで参加した八幡西区の西村真樹子さん（59）は「ボールがはっきり見えて楽しかった」と話していた。

◆「出発を励ます集い」
２００人が参加し祝福

新成人等の節目の年を迎えた知的障害者のための第33回「出発（たびだち）を励ます集い」（北九州市、市手をつなぐ育成会主催、毎日新聞西部社会事業団後援）が１月25日、北九州市戸畑区のウエルとばたであった。２００人が出席、祝福した。

北原守・育成会理事長が「共生社会を目指す」とあいさつしたのに対し、北橋健治市長が「障害者と健常者が楽しむ北九州市発祥のふうせんバレーボールは共生のシンボル。世界に広がってほしい」と応えた。

新成人や還暦を迎えた人が次々に登壇し、毎日新聞西部社会事業団が贈った記念品の奥時計を北原理事長を通じて受領した。

丸山健太さんが決意表明
「見守り応援してください」

来月20歳になる福祉事業所、とばた工芸舎の丸山健太さんが「仕事ができるようになること、サッカーを頑張ることが目標。これからもマイペースな私たちを見守り、応援してください」と決意の言葉を述べた。

この日参加のなかった小学校入学予定者、中学校卒業予定者にも後日、記念品が贈られる。